

都市と交通最終レポート

都市と交通 2025
C125077A 蒲澤世椰

【A】

私がお他チームの発表を聞き、自チームにはなかった参考になった点は大きく分けて3つある。

1つ目は、解決策の斬新さと意外性だ。発表チームの多くが誰も思いつかないような斬新なアイデアと興味をそそられるような意外性を備えた解決策を上げていたと感じる。特に、私が発表を聞いたうえで特に印象に残った解決策がある。それは、交通事故を減らすために音や光で警告する解決案だ。この解決策には、道路交通における視覚と聴覚を刺激して注意を促すことの斬新さと、実際世の中で実践されていない意外性があった。近隣住民の迷惑になるという懸念もあったが、時間帯や周りの状況を鑑みて音と光を使い分ける手法も、音と光を使った警告方法のデメリットをしっかりと補っていた。

2つ目は発表チームほとんどの解決策に実現性があったことだ。参考になった1つ目の点で挙げた「解決策の斬新さと意外性」を求めるあまり、挙げられる解決策の実現性は低くなりがちだ。なぜなら、斬新で実現性のある解決策のほとんどは、すでに世の中で実行されているか他の人や組織によって提案されてしまっているからだ。その点、発表チームの解決策は「斬新さ」と「実現性」の両立がとれていたと感じる。1つ目を例で挙げると、実現性の低さが問われる「近隣住民への影響」を考慮して、実現性を上げるための「昼と夜で光と音を使い分ける」手法を手札にもっていた。斬新さと実現性を両立させるためには、斬新なアイデアを考えた後、期待される反論を考慮して実現性の高さを証明できる説明を用意しておくことの大切さを学んだ。そして、実現性の高さを証明することは何より、発表全体の説得力を上げることにつながる。

3つ目はスライドの質だ。発表チームのスライドは要点がきちんとまとめられた良質なスライドだったといえる。自チームのスライドと比較して、スライド上の文字数がきわめて少なく、図や表を使用することで直感的に内容がつかみやすい構成になっていた。また、色使いも豊富で見ている人を飽きさせないスライドだと感じた。

【B】

自チームの提案に【A】の要素を組み込んで整理する。私たちが課題とするのは「高齢者にかんして免許を返納させるか」というものだ。よく挙がる解決策が「公共交通機関を利用しやすく整備すること」だ。ただ、この解決策には斬新さもなければ、すべての地域で実現できていない現状を見ると実現性に欠けるといってもいいかもしれない。そこで、私が考えた意外性のある解決策が「免許返納を“損”ではなく“特別な権利の獲得”として設計する制度」だ。多くの場合、免許返納は「移動手段を失う」「不便になる」といったマイナスの印象が強く、自主的な返納を妨げている。そこで発想を転換し、返納した人だけが得られる“限定的で魅力的な特典”を用意することで免許返納を促す。具体的には、買い物送迎サービスを定額かつ優先的に利用できるようにする。このパスは返納者のみが持てるため、「返納しないと得られない特別感」が生まれると考える。また、免許返納を「地域貢献」と結び付け、返納者の人数に応じて地域にベンチや街灯が設置されるなど、目に見える形で街が良くなるようにする。「自分の返納が誰かの安全につながっている」という実感を持ちやすくする。免許返納を犠牲と位置付けないことで高齢者が前向きに決断できる環境をつくることができると考える。この解決策は、高齢者のマインド変更を目的としているので、多額な整備資金が必要なわけでもなければ条例や法律を変える必要がない。よって、実現性も十分に確保できていると考える。

私が考えるこれまでの授業を受け、地方都市における交通問題を総合的に解決するために必要なことは、一つの問題を注力して解決することだ。これまでの授業を受け感じたことは、多くの交通問題は相互的に関連しあっているということだ。例えば、公共交通機関が整備されないことと高齢者の免許返納率の低さ、車社会などこれらの問題は関連しあっている。つまり、ある1つの問題がある他の問題の原因になっているという構図が成り立っている。だからこそ、いろいろな問題に手を出して交通問題全体を一挙に解決しようとするのではなく、一つの問題に注力して相互的に問題を解決していく方が地方都市における交通問題を総合的に解決するために必要だと考える。また、講義でも扱った自動運転など、新しい要素に手を出すと新たな問題が出てくることは目に見えている。さらなる利便性を求めて新たな技術に手を出すよりも先に、現状ある課題に目を向けることも必要だと考える。